

新  
歌人群像

# 永井陽子

ゆたかな愛誦性

斎藤すみ子



## 清新な出発

永井陽子は昭和二十六（一九五二）年四月十一日に、父信一、母としの次女として生まれた。父は五十歳、母は四十歳の遅い出生であり、姉の邦子とは十一年の開きがある。父は若い頃に東邦電力株式会社瀬戸出張所に入社し十七年間勤務した。頑固で正直な性格で、陽子の生まれた翌年には三回目の転職をし、山磯陶土株式会社へ入社している。

母は料理が上手で年中行事にこだわり、日記や手紙などを書くことが大好きな人であった。愛知県瀬戸市城屋敷町の家は古かったが、陽子はこの家で、質素ではあるが才気漂う四人の生活を送った。姉が嫁ぎ、父が四十八年に他界してからは、父の知を引き継いだ花好きな母と二人、ここで静かに自立していた。

陽子は高校二年生で「短歌人」に入会。二年後の昭和四十六年に「第十七回角川短歌賞」候補になった。その五十首は数を絞って小冊子『葦芽』（昭和四十八年）に収められている。

半分に分かれた太陽 玩具のように私がひとり夕焼けている

「葦芽」

幼年時代の記憶をたどれば野の果てで幾度も同じ葬列に会う

前の歌に若書きの感は否めないが、やわらかな眼差しと韻律のみずみずしきがある。後の歌では、陽子は若々しい父母の活力に満ちた姿を知らず、年齢の多い両親、特に老齢の父には人よりも早く死別の時がくるという漠然とした怯えを、幼年時代からずっと持ち続けていたことがわかる。これらの口語短歌は俵万智の「サラダ記念日」に先んじること十数年、二十歳の陽子によって発表されていた。



「歌人集団・中の会」作品研究会の後で。  
左から永井陽子、筆者、春日井建（1985年）

天のひと髪梳くあさをふるさとのかせもさやさやかなしみわたれ

『なよたけ拾遺』

人ひとり恋ふるかなしみならずとも夜ごとかそかにそよぐなよたけ

昭和五十三年に出版した第二歌集『なよたけ拾遺』は清純な歌集である。底流するのは鋭く自覚的な悲しみであり、古典を歌材としながら決して古くはない詩的空間を展開していた。

そして、巻末に収録された「式子内親王」その百首歌の世界」は、島津忠夫の指導によって書かれたものだが、詳細かつ詩的な論考で、これによって陽子は脚光を浴び歌人としての清新な出発をした。

### 樟の木から楽器まで

瀬戸市にあった陽子の家から歩いて三分の距離に、八王子神社がある。広い境内には遠くからでもすぐわかる樹形の樟の木があり、それは陽子の鎮守の杜でもあった。

世をわかち父が呼ぶこゑ六月の月なき夜に樟の木にほふ

『樟の木のうた』

さはさと父のやうにも春のやうにも樟の一本空潤むころ

第三歌集『樟の木のうた』（昭和五十八年）

では亡くなった父への思いが樟の木の形を借りて表現されている。樟の木への眷念の思いは終生変わらず、後年転居した名古屋市榑木町の大通りの樟の木を「旧知のこの木が呼び寄せたのかもしれない」と書いている。

同年十月に「現代歌人集会」と「歌人集団・中の会」が合同で開催したシンポジウム「女・たんか・女」は印象深い。パネラー（阿木津英・河野裕子・道浦母都子・永井陽子）は、事前の連絡を密にし、ビールを飲み勢いをつけて登壇。私は百人部屋を予約しておいたが、出席者数は倍に膨れ上がり、急遽、長机を折り畳み、その上に坐ってもらうとうとう、とんでもない会場設営をしたのであった。この時陽子は、社会的な男の位置へ食い込んでゆく女の思弁的な痛みや、男の評価に惑わされない批評精神の据え方について発言したが、その頃作った次の歌は代表作の一つとなっている。

べくべからべくべかりべしべきべけれすずかけ並木来る鼓笛隊

『樟の木のうた』

# 永井陽子



「短歌人」名古屋歌会で。前列左から4人目蒔田さくら子、右隣が永井陽子、2列目左端が高瀬一誌（1992年）

第四歌集『ふしぎな楽器』（昭和六十一年）では、繊細なニュアンスを崩すことなく、音楽記号その他視覚的に多彩なテクニクを駆使して、大胆に作品化している。

あはれしづかな東洋の春ガリレオの望遠鏡にはなびらながれ  
『ふしぎな楽器』

この世なるふしぎな楽器月光に鳴り出づるよ人の器官のすべてが  
丈たかき斥候のやうな貌をしてfが杉に凭れてゐるぞ

年齢的には三十代の油の乗りはじめた時期で陽子は自信に溢れ、その眼はいつも遠くを見ていた。

## 永遠の光芒

父の死後二十年を、氣丈に過ごしてきた母が脳梗塞に倒れたのは平成二（一九九〇）年の年末。八十一歳で他界するまでの二年間、陽子は名古屋市の多忙な勤務と瀬戸市の自宅と半田市の老人保健施設を往反しなければならなかった。

母の死後数か月で瀬戸の家を整理し名古屋市へ転出、二度の転居をしたが、都会のマンション生活が陽子を慰めたとは言いがたい。玄関には同居の男性がいるように装って、義兄の靴を置いた。留守番電話に義兄の声で、メッセージを吹き込んだ。やさしい智恵で身を守り危険には用心深いのであった。意に染まぬ人事異動があったりしてつらい日々ではあったが、その中で平成五年に第五歌集『モーツァルトの電話帳』を出版する。

月がすこし欠けてゐることひそひそと  
ぬすびとはぎのこゑがすること

『モーツァルトの電話帳』

曇日のなぞなぞ遊び繰り返す子らのこゑやがてはげものこゑ

ここでは、タイトル通りに五十音順に歌を並べ、のびやかに時間空間を渡り歩いた。韻律だけで歌を成立させ、私性は完璧に消し去られている。

その作品群とほぼ同時に制作されながら、二年後の出版となった第六歌集『てまり唄』（平成七年）は「第六回河野愛子賞」を受賞。

こころねのわろきうさぎは母うさぎの  
戒名などを考へてをり  
『てまり唄』  
鹿たちも若草の上、にねむるゆゑおやすみ阿修羅おやすみ迦楼羅

母の介護という現実を昇華し、母を通して老いと死に直面し、深い悲哀に目の届いた作品である。

そして陽子に転職話が持ち上がったが、誰にも相談せず一人で決めてしまった。常に決断の早い人であった。県職員から短大助教へと変わる新しい勤務内容に、陽子は大きな希望を抱いて赴いたのに違いない。しかし予想していたことと現実とは大きく違っていた。その上、肝炎のため四十日間の入院を余儀なくされ、十月からは休職。陽子の体は少



中京大学「フェスタ・イン・なごや」七年目の～女・たんか・女～で。左から永田和宏、阿木津英、河野裕子、道浦母都子、永井陽子（1990年）

女のように繊細で、その精神についてはゆけなかった。殊にシックハウス症候群は深刻で、厳冬の夜中に部屋の窓を全開にしなければ呼吸ができないと私に言ったことがある。すべては病気のなせる業であったのだろう。

平成十二（二〇〇〇）年一月二十六日夜、永井陽子は死去した。誰にも見守られない四十九歳の孤独な死であった。

その年の十一月二十三日には、名古屋で「永井陽子を偲ぶ会」を行った。当地方では

未経験の会のために、こまごまと心を砕いてくださったのは高瀬一誌であった。案内状に「平服で」と入れるように指示されたことも忘れ難い。だが高瀬は、「偲ぶ会」に出席することはなかった。本誌二〇〇五年三月号の「新歌人群像―高瀬一誌」によれば、高瀬は同年十一月に臓癌の手術を受け、十二月には再手術を受けている。

百余人の出席を得て、遺族も同席した「偲ぶ会」は、死の深刻さはありながらもさわやかな雰囲気には終始したが、これは陽子の歌自体から来る印象のもたらすものであろう。

没後、遺歌集『小さなヴァイオリンが欲しくて』（平成十二年）、遺稿集『モモタロウは泣かない』（平成十四年）、『永井陽子全歌集』（平成十七年）の三冊が出版されたが、特に全歌集では、陽子の非凡な才能のすべてを系統立てて読むことができ、嬉しいことである。

最近、陽子の歌を歌壇以外のメディアが取り上げるようになった。「独立行政法人国際交流基金」のロシア語翻訳出版事業では、アンソロジーに「あはれしづかな」など十五首を収録。中学校の国語教科書や参考書（中学新ワーク、好学出版、学校図書など）、全国学力テスト（能開センター）では、次の中の一首をそれぞれ掲載している。

馬にでも喰はれてしまへ 呵呵呵呵と笑  
ひ大屋根を越えてゆく雲

『モーツァルトの電話帳』

月の光を気管支に溜めねむりゐるただ  
やはらかな楽器のやうに『ふしぎな楽器』  
傷のやうなレモン一片掌に置けばふる  
さとはしんとあをき夜なる

『なよたけ拾遺』

「幼児からのくもんの短歌カード」では「べくべから」が愛らしいカードになった。

陽子の歌は、ことばの意味や機能を取り払って、直接感覚に訴えかけてくる。幼少年でも口にする事の可能な、明るくみずみずしいリズムがある。陽子は生涯結婚せず子どもを持たなかったが、日本のどこかの地方で、園児、児童、生徒の柔軟な感受性に、教科書やカードの陽子の歌と心が、植えつけられてゆくのではないだろうか。次代の感性に引き継がれ浸透してゆくのではないだろうか。

陽子の死は早過ぎその断念は早過ぎだが、回想の中では陽子は決して消え去った人ではない。愛誦性ゆたかなその歌は、危機の時代を背景としてにんげんのやさしさを思い起こさせ、どの歌もとても温かいのだ。

（さいとう・すみこ）「中部短歌」選者・編集委員